

タイトル	省農薬農業を求めた者として原発を考える
氏名 (所属)	石田紀郎 (NPO 法人・市民環境研究所)
ホームページ	<a href="http://www13.plala.or.jp/npo-pie/index.html">http://www13.plala.or.jp/npo-pie/index.html</a>
キーワード	農薬、放射能
アピール文	省農薬、省エネ
要旨	<p>この 40 年の間に、農薬に対する社会の見方は大きく変化し、農薬を多用しなければ農業は継続できず、食糧生産は滞るとの考えは幾分なりとも払拭され、農業生産とは、農民が安全な生産環境で、安全な作物を、安定的に生産することであり、それを消費者が支える社会的、経済的構造が重要であると、世の中が認識するようになってきた。省農薬とか減農薬とかいう言葉は日常用語となった。</p> <p>農薬以上に厄介な環境汚染物質である放射能が福島では撒き散らされた。旧ソ連邦のチェルノブイリ原発崩壊事故からすでに 25 年経ったが、未だに原発周辺の地域は人が住めない土地となっている。一旦、原発が崩壊すれば、このような悲惨な地域が発生することは、少し考えれば誰でもが予測できることだが、その教訓は生かされないままに、日本でも、世界でも、原発をひたすら増やし続けてきた。それは農薬多用農業をひたすら進めてきた以上に、深刻な問題を地球上のもたらした。そして、東電福島原発崩壊を発生させてしまい、福島の人々に困難を背負わせてしまった。</p> <p>農薬も放射能も、一旦環境中に放出すれば 2 度と回収できない代物である。大気系、水系、土壌系を命運が尽きるまで漂い続け、その間に多くの生物に困難をもたらす。しかし、農薬は程度の差はあるが、環境中で、微生物などによる分解 (生分解)、酸素による分解 (酸化)、紫外線などによる分解 (光分解) を受けて、元の形から順次変化し、多くの農薬は炭酸ガスや水や窒素化合物となって無毒化する。もちろん、長年月を必要とするものもあれば、短期間のものもある。それに対して、放射能はいかなる分解も受けることはなく、放射性物質それぞれの固有の減衰期によってその毒性を減衰するだけである。その年限は 1 年や 2 年間ではなく、100 年も 1000 年も 10000 年もの間である。</p> <p>2011 年 10 月 31 日に地球上の総人口は 70 億人となると国連の機関が発表した。食糧もエネルギーも当然のこととして逼迫してくるだろう。農薬を使って増産し、原発を多用してエネルギーを確保して、安全・安心とは対極にある世界に再び戻るのか、それとも、農薬禍や福島の悲劇に学んで、新たな価値観の社会を求めるとかの岐路にいま立っている。</p>